

西南野球部を復活させた 大先輩 “高橋清悟氏”

野中 英二

1. 西南野球部の歴史と日曜日問題

西南学院の歴史の中で、創立者 C.K. ドージャー院長を辞任に追い込んだ野球部の日曜日問題はあまりにも有名であるが、高橋清悟先輩について語る前にその西南野球部の歴史について触れておきたい。

西南学院大学硬式野球部は、今年創部90周年を迎える。野球部は学院創立から5年後の1921（大正10）年、西南学院高等学部設置と同時に創部された。運動部としては、柔道部に次いで2番目（剣道部と同年）の創部であった。当然、活動費や道具のない時代であるため、赤坂門にメリヤスや足袋の店を出して活動費を捻出していたようである。そして、創部後初めての試合は九州歯科医専（現九州歯科大学）との対戦で、部員数も少なく道具もなく、他のクラブからの助っ人をお願いし、中学部他からの道具の借用によって、やっと試合ができたほどであった。

当時のメンバーには、のちに第10代西南学院長となる伊藤俊男氏（1925年旧制高等学部文科卒）、福岡大学の前身、福岡高等商業学校を設立した溝口梅太郎氏（1925年旧制高等学部商科卒）などがいた。

1922（大正11）年には岡部平次郎氏、翌年に安田幸治氏と伊藤八郎氏、さらにその翌年には荒巻秀雄氏、岡賢二氏が入部、やっと硬式野球部として内外から認知される状況となった。その後、八幡製鉄（現新日鉄八幡）や門鉄（門司鉄道管理局、現 JR九州）などのノンプロの雄と互角に渡り合うチームに成長する。

1927（昭和2）年は、西南野球部にとって忘れられない年となった。九州高専大会で快進撃に沸く野球部は、次の準決勝が校則で禁止されていた日曜日に開催されるのも構わず、当時の強豪校長崎高専戦に臨み6対1で快勝、福岡高校との決勝戦に駒を進めた。しかし、C.K. ドージャー院長はこれに激怒、即刻全員停学処分とし決勝戦は流れてしまったのである。

大会が日曜日に開催されることが多く、他校との関係上これを避けることは不可能で、学生たちの不満は募る一方であった。一生懸命頑張っても、日曜日に重なると試

合に出場できないという学院の理解の無さに嫌気がさし、当時のエースの辻猛氏は西南学院を退学、立教大学へ入学して活躍し、のちに立教大学が4連覇した時には監督を務めた。

この日曜日問題は野球部にとどまらず、強くなった他の運動部も同様の問題に直面する。そして、ドージャー院長の厳格すぎる教育方針に反発した学生たちのドージャー排斥運動により、1929（昭和4）年7月にドージャー院長は辞任する。西南学院で安息日の試合が正式に認められたのは、これから9年後の1938（昭和13）年のことである。

当時の「九州学生野球リーグ」の加盟校は、西南学院、九州歯科医専、福岡高商（現福岡大）、九州帝国大、福岡高校（ともに現九州大）、九州医専（現久留米大）、明治専門学校（現九州工大）の7校で、翌年から久留米商工（現九州大工学部）が加わった。1940（昭和15）年には、九州学生野球リーグにおいて春・秋連覇し、夏の全国高専大会には西日本球界を代表して甲子園に出場、11月には明治神宮大会にも出場した。

当時の九州野球のメッカは、1924（大正13）年4月に開通した九州鉄道（現西日本鉄道大牟田線）の近くに同年10月に完成した春日原球場だった。少年野球、中等学校野球、大学高専大会、都市対抗野球などが開催された。春日原球場の周辺には、陸上トラック、テニスコート、バレーコート、バスケットコート、相撲場など様々な運動施設がつくられ、小学生の大会から国際大会まで幅広いクラスの大会で賑わった。しかし、戦時中はここに滑走路がつくられて荒廃し、戦後は福岡中心部に平和台球場ができたため、1953（昭和28）年を最後に公式戦は行われなくなり、春日原球場周辺は住宅地に転用された。今の春日原北町、春日原東町、春日原南町にあたる。

そして、1943（昭和18）年には文部省の方針により野球の大会、試合等も統制されて、「敵性競技」として徐々に表舞台から消えていくことになる。1943（昭和18）年の「西南新聞」には「凋落する野球部」と題して次のような記事が掲載された。

「…一方、大会、試合等を極めて重点的に統制されてゆき、野球の如きは学徒体育振興会の競技種目から除外され本学部では直ちに之を解消するとまではゆくまいが過去の華やかな夢を追ふことは許されなくなった、幾多有力選手を擁して伝統を誇った学院野球部の如きその過去を知る者には洵に今昔の感があるがその凋落も戦時下資材等の入手も近く不可能となる模様であるからこれも亦止むを得まい。…」。（『西南新聞』、1943年5月25日付第58号）

戦後になって1946（昭和21）年に福岡県大学野球がスタートし、西南野球部も復活し、のちに黄金時代と評されることになる。1948（昭和23）年にはその黄金期を支えた名手・石橋哲氏（1947年旧制経済専門学校卒）を監督に迎え、全国専門学校野球大会では全国大会出場を果たした。その後「福岡四大学リーグ」として正式に発足したのは、1951（昭和26）年のことである。加盟校は西南学院大、九州大、福岡商大（現福岡大）、久留米大である。当時は、今のOB会の基礎を築いた初代OB会長・塚本昭二氏（1948年旧制経済専門学校卒）、第2代OB会長・松尾達二氏（1952年大学文商学部商学科：52期）、元監督・藤村和芳氏（52期）、元部長・高田駒次郎氏（53期・元本学商学部教授）、そして山城照清氏（57期）、三井田一雄氏（58期）などが活躍した。特に、山城・三井田（ともに修猷館OB）のバッテリーは社会人野球の日本新薬でも活躍し、西南学院の名を広めた。

そして、1957（昭和32）年には現在の九州六大学野球連盟が発足する。本学はその年の秋季リーグ戦で優勝、その後3季連続3位のあと、1959（昭和34）年秋季から3季連続優勝を果たした。当時は主将の原富隆氏（61期）、エースの手島四男美氏（61期）、山口重実氏（61期）などが中心であった。この優勝を最後に、西南学院大学は50年もの間優勝から遠ざかっている。実に半世紀である。

1966（昭和41）年には、学院創立50周年を記念して本学と福岡大の間でリーグ戦最終戦を応援合戦（学校行事）として開催するようになった。その後、船越栄一学長の時にはクラブ強化のための特待生制度が始まり、本学からも現在のプロ野球の世界にOBを輩出することとなった。1978（昭和53）年には大洋ホエールズドラフト1位で門田富昭氏（78期）、1980（昭和55）年には西武ライオンズドラフト4位で蓬菜昭彦

氏（80期）がプロ入りした。

門田富昭氏の39勝は、現在も九州六大学の最多勝利記録として残っている。また、完全試合は3人が達成しているが、その内2人は本学の投手（門田富昭氏、北山幸弘氏（92期））である。無安打無得点試合は、武田重美氏（80期）と交換留学生のジェレミー・ウムランド氏（愛称：ジェリー、



野球部員とドージャー院長

81期)が記録している。

これらの西南野球部の歴史を見てみると、多くの優れた選手が活躍している。優勝から遠ざかって50年経った今、創部90周年の節目の年に現役の選手たちが大きなことをやってくれそうな期待感で一杯である。

2. 西南野球部を復活させた大先輩“高橋清悟氏”

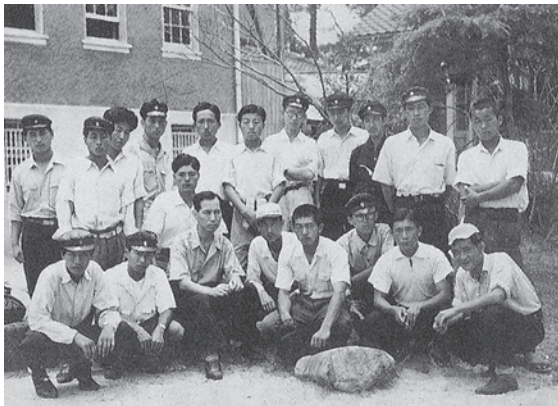
大川に「庄分酢」(旧社名：酢屋商店)という、酢や関連商品の製造販売を手広く行っている会社がある。江戸時代初期の寛永年間から代々続くこの家は、元々造り酒屋であったが四代目の時にその技術を元に酢造りを始めた。350余年の歴史を物語るかのような風格と趣があり、「高橋家住宅」として大川市の指定文化財となっている。

現在は久留米市城島町に工場があり、朝倉市にも新工場「あさ蔵の杜(もり)」とビネガーレストラン「時季のくら」ができています。レストランは昨今の健康ブームもあってか、休日には大勢の人が訪れ、並ばなければならないほどの盛況ぶりである。高い天井と自然光をうまく取り入れた建物には、明るく落ち着ける広い空間が用意されている。高速道路(大分自動車道)のすぐ横にあるが、周辺は竹林など自然が多く、食事とともにゆっくりとした時間が堪能できる。現在は、14代目の高橋一精氏が社長を務めている。その庄分酢の「酢屋商店」時代の会長が、高橋清悟氏(1947年旧制経済専門学校卒：故人)である。私は10年以上前に何度か大川の高橋先輩を訪ね、学生当時の思い出話をお聞きしたことがある。

高橋先輩の学生時代は、戦中戦後である。その当時から強かった西南野球部は太平洋戦争により空白の時代をつくることになる。現在の伝習館高校出身の高橋先輩は、初めは柔道部に所属していたが、GHQの武道禁止令によりその情熱を奪われることになる。そこで、その有り余った体力と情熱の矛先を、表舞台に戻りつつあった“野球”に向けたのである。最初は親しい仲間とキャッチボールをやりようと集まったが道具はなく、当時のフクニチ新聞社の桐島氏の力添えによりやっと手に入れた道具を、何度となく縫って使ったそうである。その後は、地元福岡では有名であった高倉三兄弟の「三鷹スポーツ」(新天町)の次男・高倉涼介氏(1938年旧制高等学部高等商業科卒)のところに、お金ではなく米や砂糖などを持って行って道具を手に入れた。そしてやっと試合ができる状況になり、西南野球部復活の時を迎えるのである。

当時は、とにかく食糧事情が悪く、特に福岡はひどかったようだ。九州経専・大学の大会が、農産県で食糧が豊富という理由から熊本で開かれていたほどである。その

頃は、大分経専が強く、のちに阪急に入った荒巻投手に全く歯が立たなかった。ただ西南も高橋先輩と、のちに監督を務める石橋哲氏などを擁し、西南野球部の歴史の中で黄金期と称される野球部をつくったのである。「西南新聞」には戦前の黄金時代を懐かしみ、全国専門学校野球大会で以前の姿に近づきつつある野球部の記事が掲載されている。



前列右から四人目が高橋先輩

「…予選に於いては、名監督石橋氏の指導と、吾等野球部ナインの日頃の練習になる確固たる信念とを以って一戦一勝、鹿児島農専、久留米医大、熊本業専と次々に倒し、此処に全国大会出場の栄誉を得ゲーリグスタジアムに駒を進めた。然るに第一回戦に優勝候補横浜経専に惜しくも破れ(ママ)去った。あゝ唯胸に抱きし再興の一字も唯一片の悲しき夢に過ぎにしか、逆境に孤立せし吾等は、如何なる罵倒も甘受し覇気満々として、再興の意に燃えたり、感涙に奮起し、干断の猛闘は必ずや今年全国制覇の栄冠を勝ち得ると確信する。」(『西南新聞』、1949年1月28日付第68号)

高橋先輩は実家の仕事で酢の樽を担いだりしていたので肩が強く、捕手を務めていた。監督は松尾良氏(1940年旧制高等学部高等商業科卒)で、投げて打つだけの野球ではなく戦術的な野球を選手達に教え、高橋先輩は地元大川に戻ってその高度な野球を広めて、地元で一躍有名となったのである。高橋先輩はいろいろなチームから請われて野球を教えたが、その時の人と人との繋がりがその後の人生にも大きく役立ったと語った。「今の自分があるのも西南野球部のおかげだ」というのが高橋先輩の口癖であり、その想いは地元での同窓会活動にも表われていた。地元での同窓会の企画や取りまとめ役を務め、一線を退いた後も西南の同窓生として地元に多大なる貢献をいただいた、というお話を同窓会大川支部のうなぎの「本吉屋大川店」の本吉さんより伺うことができた。

高橋先輩の西南に対するそのお気持ちを、硬式野球部に対しては現役への支援という形で、毎年多額のOB会費をいただいた。以前は忙しさもあってか、OB会活動へは参加していらっしゃらなかったが、ある時突然お電話をいただき、「これからはOB会費は払うけん、現役で伝習館出身の佐藤（98期）ば受け取りに寄せ。いくら欲しかとか？」との唐突なお話であった。この当時佐藤は、「現役の選手が取りに来ん限りOB会費は払わん」、と言われたそうである。その際には、ボールやバットに現役選手に感謝のメッセージをしたためさせ、お礼として持って行かせた。この時に佐藤がいただいていたのは、20万円の小切手だった。その後、佐藤が卒業すると、当時監督を務めていた私が受け取りに行くことになり、毎年、小切手をいただきに大川へ足を運んだ。その度に、2時間ほど正座したまま昔話をお聞きした。足はしびれたが、誠に興味深い話だった。先輩とは有難いもので、卒業した佐藤は福岡銀行に就職し、大川支店に配属になって事あるごとに呼び出され、利率の低いこの時期にも関わらず何度も多額の預金や、金融商品を購入いただいたそうである。

私が監督を務めていた1997（平成9）年の秋季リーグ戦、平和台球場最後の西福戦（応援合戦）に、高橋先輩ご夫妻が大川から駆けつけてくださった。試合は接戦となったが、福岡大の井場投手（のちに富士重工よりドラフト1位で日本ハム入団）を打ち崩し、延長11回サヨナラ勝ちという結果を取めることができた。高橋先輩にもいい恩返しができたと思っている。ただ、その時気分がよかったので高橋先輩は平和台から西鉄福岡駅まで歩き、それにより足にできたマメが原因で左足の膝下を切断、その後車椅子の生活を余儀なくされたことは非常に残念なことであった。

当時、高橋先輩からは現役へのメッセージとして、「積極的に多くの人と接して交友を広めることにより、自分を磨くことができ、必ずや自分の人生にプラスになる。」というお言葉をいただいた。これは現役部員や野球部OBだけではなく、今の西南生や卒業生に対するお言葉でもかと思っている。特に、今のクラブ活動を行っている学生の横の繋がりやの無さには閉口する。まさに「高橋先輩の言葉」を心に刻み、成長して西南から巣立って欲しいものである。

最後に、高橋先輩のご生前の多大なるご支援に感謝するとともに、卒業生を含めた多くの後輩たちが高橋先輩の遺志を引き継いでいくことを祈念し、そして、今年が本当の意味で西南野球部復活の年となることを期待したい。